

# たくみ

## Craftsmanship

特集 瀧田史宇作陶展  
 特集 民藝巨匠作品特別展示会  
 -併催 日本と海外の古民藝-

第36号

### 黄八丈と黒潮文化

伊豆七島の中でも八丈島は黒潮海流の本流に位置し、昔からその恩恵を受け、また黒潮と季節風ゆえに本土と隔絶した孤島の悲哀を味わってきた。しかしその複雑な海流と季節風を熟知しさえすれば、琉球や奄美諸島、そして紀州や伊豆半島、房総や三陸あたりとの交流は容易であったという。

八丈島といえは昔から絹織物の黄八丈が有名だが、「八丈実記」などによれば、室町時代中期には関東管領が代官を派遣して絹織物を上納させ、その後北条氏を経て徳川幕府の支配下に入り、黄八丈を主として貢納したという。もとより八丈島は汐風により米麦はほとんど育たず、検地は各種織物への換算という形で行われた。ところで中世から流人の島として知られた八丈島で、なぜあの美しい黄八丈が織られつづけられたのだろうか。

これははじめにも書いたように、黒

潮によって琉球や奄美の絹織物の技術が、かなり古くから伝わり、献上品として、また米穀との交換物として積極的に織られるようになったからであろう。

その八丈島の「黄八丈ふたり展」山下八百子、芙美子が、さる十月十九日から五日間、銀座のミキモトホールで開かれた。

黄八丈は、あの独特な黄色と茶色の透明感のある美しさで知られ、主に平織であるが、今回の会は、ハレの場にも着られるようにと綾織りの作品が中心であった。ほかに黒八丈もあって、その柄行きの斬新さは見とれるほどであった。絹糸は新小石丸という特別の繭で宮中で飼育の小石丸の系統という。紛まがいものは知らず、山下めゆ工房は染料は刈安かりやすやたぶの木、しいなどの天然の植物を用い、独特の沼ツケの方法も守りつづけた。戦後の復興に際し、たくみの協力で柳悦孝先生が再々渡航されたことも思い出である。

(志賀直邦)

たくみ企画展

## 瀧田史宇作陶展

会期 平成十九年十二月八日(土)～十三日(木)

十二月九日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階サロン

営業時間 十二時から十九時まで

(日祝日・最終日は十七時半まで)



呉須菱抜捻り花文大皿

### 瀧田史宇さんの仕事

史宇さんの仕事場は那須烏山の大字滝田である。父君、瀧田項一先生と一緒に、いつも阿吽の呼吸の仕事ぶりである。

スペイン留学から帰って二十余年。ますます技術に磨きがかかるが、ここいらで父君にお許しを願って、もう一度遊学の旅に出るのもいかがだろう、とおせっかいなことも考えるので



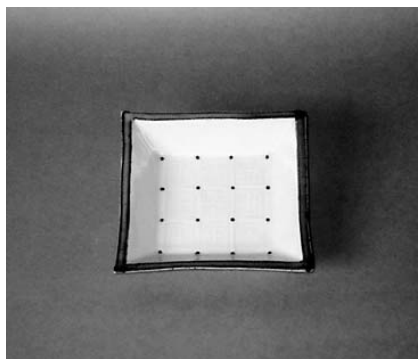
上絵花文鉢

ある。

といっても、とくに理由があるわけではない。ただ、百歳までも作陶を続けたといわれる怪物・項一先生との研鑽の日々が、史宇さんにとっても楽しく、そして豊かな実りであることを、愛好家としては期待するのである。

それにしても今年もわが家の食卓に、新作の史宇さんの器が並ぶことであらう。

(たくみ志賀直邦)



白磁押文角皿



赤絵魚文向付



白磁鑄手向付



赤絵コーヒーカップ



上絵捻り花文五寸皿



赤絵四弁花文八角皿

歳末特別展

# 民藝巨匠作品特別展 示会

## 併催ー日本と海外の古民藝ー

会 期 平成十九年十一月二十四日(土)～十二月三日(月)

十一月二十五日(日)、十二月二日(日)、は営業いたしません。

会 場 銀座たくみ二階ギャラリーI

営業時間 十一時から十九時まで(日曜日・最終日は十七時半まで)

出品作家

柳宗悦、濱田庄司、富本憲吉、バーナード・リーチ、芹沢銈介、棟方志功、船木道忠、船木研児、金城次郎 ほか



B. リーチ 天目釉四方大瓶

日本民藝館を中心とする民藝運動は戦後だけでも六十二年になります。その間、数多くの同志、作家、愛好家の方たちが、日々の暮らしの中で地方や海外の新古の民藝品を求め、愛で、楽しんでこられました。それらの品々が再び使い味を加えて店頭に出されます。ご一見の上お手に取り下さい。

## 日本と海外の古民藝

### 【出品品目】

陶器 堤焼大がめ、瀬戸本業焼大皿、德利、伊万里猪口ほか

染織 緋、唐棧、紬着尺、小裂、のれん

木工 朝鮮バンダチ、膳、鳥取木枕、古箏筒ほか

雑貨 漆器、柱時計、燭台、古地図ほか

海外 イコン、ガラス絵、エツチング額、アンデス古裂額、ペルー土器、欧州ピッチャー、ガラス器、ランプほか

書籍 柚木作品集、鉄斎書簡集、中国の工芸、日本のガラス、民藝四十年、ペルシャ錦、白洲正子私の骨董ほか

海外 イコン、ガラス絵、エツチング額、アンデス古裂額、ペルー土器、欧州ピッチャー、ガラス器、ランプほか

書籍

海外 イコン、ガラス絵、エツチング額、アンデス古裂額、ペルー土器、欧州ピッチャー、ガラス器、ランプほか

書籍 柚木作品集、鉄斎書簡集、中国の工芸、日本のガラス、民藝四十年、ペルシャ錦、白洲正子私の骨董ほか

書籍 柚木作品集、鉄斎書簡集、中国の工芸、日本のガラス、民藝四十年、ペルシャ錦、白洲正子私の骨董ほか

書籍 柚木作品集、鉄斎書簡集、中国の工芸、日本のガラス、民藝四十年、ペルシャ錦、白洲正子私の骨董ほか

書籍 柚木作品集、鉄斎書簡集、中国の工芸、日本のガラス、民藝四十年、ペルシャ錦、白洲正子私の骨董ほか

書籍 柚木作品集、鉄斎書簡集、中国の工芸、日本のガラス、民藝四十年、ペルシャ錦、白洲正子私の骨董ほか

書籍 柚木作品集、鉄斎書簡集、中国の工芸、日本のガラス、民藝四十年、ペルシャ錦、白洲正子私の骨董ほか



芹沢銈介 金彩板絵



伊万里 染付大皿



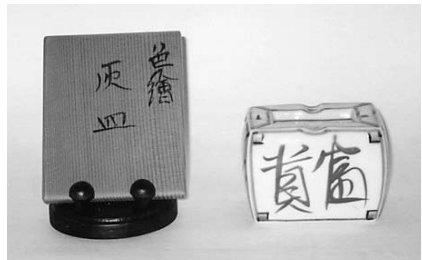
埴焼 流釉大がめ



浜田庄司 塩釉櫛目藍差注瓶



金城次郎 魚紋筆筒



富本憲吉 赤絵富貴紋灰落



古伊万里 染付猪口



鉄絵徳利2種(瀬戸)



イコン ヨーロッパ(左)とロシア(右)



馬の目皿(左)と染付徳利



水注 ヨーロッパ(左)とドイツ(右)



染付小品3種(中国)



柱時計

新刊紹介

『津軽風絵』

相馬貞三著

津軽の風絵については、青森や東北民藝の泰斗、相馬貞三氏（青森県民藝協会元会長）が生前からその研究の成果を著すべく準備されていた。それがようやく没後十九年を経て、ご家族の手で上梓されることになった。

青森や津軽の風絵やねぶた絵は、国

内の同類のものの中でも特異な存在感と美しさをもつ。相馬氏はいう。

「津軽風はけんか風ではない。あげるばかりの風でもない。あげてから見る風である。それは風絵師のものだけの力によって成育されたのではない。津軽人全体の力によるのである。」また「その筆法は、雪一色の世界から抜け出づる北国の春の風の絵として、全く鮮烈独特の表現をもつにいたった。」

津軽風のモチーフは昔ばなしの主人



巴御前



孔明

公が多く、平家物語、三国志、水滸伝などから画題をとり庶民の人気を博した。明治初期より名人が出て、今日までその画風を伝えていくという。

本書は研究書としてだけではなく、数多い原色図版によって津軽風絵の魅力を充分に伝えている。(S)

版元は、つがる工芸店（會田秀明・青森市桜川七一九一四十一）定価三千円。たくみでも取り扱っております。

## 『芹沢銈介の造形―色と模様・展』

### 一、菊池寛美記念智美術館

「芹沢銈介の造形・展」を見て

白鳥 誠一郎

東京・虎ノ門にある菊池寛美記念智美術館で開催されている「芹沢銈介の造形展」を見た。智美術館は二〇〇三年に開館した、瀟洒で、洗練された内装を持った美術館である。

ここ数年、各地で芹沢展が開催されたが、そのほとんどが代表作を盛りだ



図録の表紙

くさんに展示した展览会だった。しかし、この展览会はその正反対を行って、この作品を丁寧に見せ、その美しさをきわだたせている。アクリルにはさんで違い棚に展示した「十三妹」、山なりに配置されたカレンダー、一つ一つスポーツライトを浴びた絵皿の肉筆下絵、一枚だけぼつんと置かれた板絵。：

初めて見る作品の美しさにも打たれたが、見慣れたはずの作品の美しさにも改めて息をのんだ。芹沢が真に優れた造形力の持ち主なのだということを再認識させられる、すばらしい展示だった。作品の選択、配置、ライティングに、さぞ入念な準備があつたことだろうと思う。

展览会開催に伴い発行された図録も、美しい作品が多数収録されていて見ごたえがある。だが、なにより巻末に収録された監修者の金子量重先生の長編の論文によって、この図録の価値

が決定づけられているといえよう。

静岡への帰りの新幹線の中で図録を繰りながら、芹沢銈介の底知れぬ偉大さを改めて思い知らされていた。芹沢は富士のような人だと思ふ。誰にも愛されるが、しかし誰よりも高くそびえて峻厳であると。

(静岡市立芹沢銈介美術館・学芸員)

### 二、芹沢銈介作品の魅力

志賀 直邦

芹沢銈介の藝業の魅力はまことに尽きるところがない。家業が呉服屋で、東京高等工業(今の東京工大)で图案を学び、青年期に柳宗悦の著作「工藝の道」に触発され、また沖繩の紅型のうちくい(風呂敷)に感動して自らの行く道を心に秘めた芹沢であつたが、しかしその後の彼の仕事の展開は多彩であり、一刻として停滞するところがない。





展示会場内観

着物（着尺）、帯、のれん、屏風、壁掛、風呂敷、座布団などの染布の品々。また和紙を用いた作品では軸や額装の染絵、物語絵、うちわ、絵暦、蔵書票など。筆彩のものではガラス絵、板絵、泥絵、水彩画など。さらに雑誌

「工藝」の装丁をはじめ書物の装丁には独自の境地を拓いた。

その芹沢銈介の全藝業から、まことに適切に選ばれた展覧会が、虎ノ門の菊池寛美記念・智美術館で、十二月十六日（日）まで開かれている。この

展覧会は民族造形概念の提唱者として知られる金子量重氏の監修による。氏は芹沢銈介と数十年に及ぶ親交をもつだけに、芹沢が自らの仕事や作品に寄せた思いや感動をもっとも知る一人であった。

この智美術館はもともと陶磁器の展覧を目的とし、またアメリカの建築家の設計によるだけに各展示室の構成が立体的で、しかもいかにもアメリカ北東部にありそうなセミ・クラシックな造りであった。そういった中で、芹沢の「染分いろは紋屏風」が屹立し、

また掛け軸「和紙讀」も壁から浮かんでいるかのようだ。

ふつうよくあり勝ちな美術館の、盛りだくさんの展示とはちがって、選ばれた各室の展示は、会場入り口の板絵の小品をはじめ照明とのコントラストも良く、静かであった。

そして芹沢の人気作品の代表であった絵暦（型染カレンダー）の、年度の十二枚が全葉壁面に並べられたことで、年度ごとの絵暦のモチーフが鮮明となつて面白かった。

そのほか出品作品は、着物から筆彩画、書物の装丁まで、芹沢の藝業の全容を網羅するが、なかでも横浜港北公会堂ホールどんちやうの舞台緞帳のデザイン原画は、色彩と模様どらまの天才といわれた芹沢の才と技の源泉を見る感があった。さらにいつも思うことだが、芹沢の仕事は、大作、小品の如何にかかわらず、その美の本質と彼が込めた思いはまったく同じだということであった。

## 切り干し大根の味

吉本力

もし、もう一度会えるなら、是非会って、お詫びをしたい。お礼も言いたい。ずっと、そう思い続けてきた。

小学校の時、二階に上がる階段の途中の空間を、空けたままでは勿体ないので、棚を作って、そこに美術全集を並べていた。学校から帰ると、トントントンと階段を上がって自分の机に向かう。途中で、美術全集の一冊をつかんでいた。モロー、ミレー、ドガ、マネ、モネ、ドラクロア、ゴッホ、ラファエロ、レンブラント、何度でも眺めた。一枚一枚の絵が、心の中に焼きついた。昭和二十九年三月、母がなくなつて、住み込みの看護婦のおばさん、炊事をしてくれていたおばさんに、お暇がでて、父と私たち兄妹だけになった。炊事も掃除も洗濯も、すべて自分たちで

することになった。

私は、中学二年生。ある時、学校からの帰りが遅くなつて、日が暮れかけていた。家へ着くと、小学六年生と二年生の妹二人が、私の顔を見るなり、「お腹が空いた」と、シクシク泣き出した。「さあ、ご飯を作ろう」というと、「お米がない、お麦もない。お父ちゃん、お金置いていって呉れへんかった。」と、一段と泣き声が大きくなった。美術全集の何冊かを持って、中座の前の天牛（古本屋）へ行った。二人のおじさんのうち、はげ茶瓶の小太りしたおじさんは、いつも少し高いめに買い取ってくれた。

そのお金を持って、いつも遅くまであけている八百屋へ行くと、おばさんが、ヤミ米と麦を頒けてくれた。一枚五円の薄揚げを買って帰った。水屋には、母の旬日祭の時のお供えの乾物があつた。切り干し大根と、小さく切つた薄揚げとを、砂糖と醤油で煮て、おかずとした。

夢中だつた。悲しいともわびしいとも苦しいとも思わなかつた。只々、目の前に起こってくることに対処するだけだつた。

十年後、二十年後、食卓に上がる切り干し大根を味わう度に、当時のことが懐かしく思い出されてくる。神様は、太陽の光を降り注いで、大根を飛び切りおいしい味にして下さつた。お金がなく、困っていたあの時に、こんなにおいしいものを頂いていたのかと思うと、有難うて有難うて、胸に込み上げてくるものを押さえることができない。

(たつさや・主宰／大阪市)

## ハツタル

三浦 正宏

北海道と北東北には、アイヌ語起源の地名が少なくない。

アイヌ語の地名は、地形や動植物、気象のほか、人の暮らしのありようなど、さまざまな事柄を示すものであるが、数においては川のような呼んだものが圧倒的に多い。それはこの土地にアイヌの人たちが住んでいた時代から今にちまで、川は生命の源であり、地域の生活基盤であったからである。

川のように呼ぶアイヌ語に「ハツタル」という言葉がある。川の流れがゆるみ、水がよどんで深みになった淵を意味する言葉である。

北海道の後志海岸沿いにある発足（はつたり）という地名は、アイヌ語で淵を呼んだ地名である。もとは掘株川の中にあつたカムイ・ハツタル（神・淵）と呼ばれていたところである。

ここは昔から鮭が多く入り込む淵だったので、山の神（カムイ）である熊がやってくる、いつも鮭をとっていたことからそう名付けられたのだという。

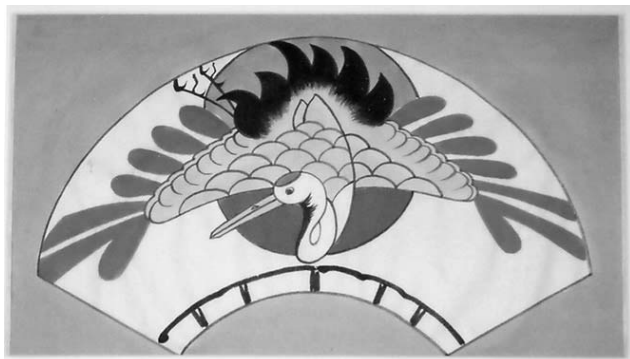
宮城県鳴子ダム（東側には半俵（はんなたら）山という山がある。これは陸に上がって山の名前になってしまったが、もとは荒雄川の淵を呼んだアイヌ語地名である。半俵山についてアイヌ語地名研究家の山田秀三は、昭和三十二年の著書に「荒雄嶽の入り口は大渓谷である。その部分は道路から見ると脚下遙かな峪底が、あるいは早瀬になり、あるいは青々とした淵になっている。東側には岸壁の半俵山がかぶさるように聳えている」と書いている。秋田にも川の「淵」を呼んだアイヌ語起源の地名がある。秋田市太平の「八田」である。アイヌ語で淵を意味する

言葉を「ハツタル」と書いたが、アイヌ語は文字をもたない音だけの言語である。このアイヌ語の発音を正確に表記すればローマ字で「hattar」だが、語尾の「r」はわたしたちには聞き取りにくい音である。その昔、太平に移り住んだ和人の耳には「ハツタ」と聞こえ、その音に「八田」の文字を当てたのであろう。

八田には龍淵山正応寺という古いお寺がある。その山号の由来は「寂照禪師が開山のころは、太平川が境内近くまで迂回しており、地藏尊の建つている堂宇の下まで流れて大きな淵になっていた。そこには龍が住んでいた。禪師は法力をもって退散させたことから龍淵山と号した」のだという。

秋田市太平の八田という地名は、太平川の淵を呼んだアイヌ語起源の地名である。それを土地の古刹は対訳のような山号によつて証してくれるのである。

『いわな文芸』会友／秋田市



扇面風絵「日の出鶴」

## たくみ歳時記 扇面風絵「日の出鶴」

この絵は十余年前からたくみ所蔵の品で、当時より名人の作と聞いていた。津軽風絵は、相馬貞三氏の記すところによれば、昭和十年代の初めに、柳宗悦、浜田庄司、河井寛次郎にお見せしたところ、諸先生とも大いにほめて、将来復興すべきものの一つ、といわれたという。

相馬氏は津軽風絵の旧作とその伝統が失われることをおそれ、収集に励むと共に名工吉谷彦衛にはかり、その復元、再興につとめた。

先般上梓の「津軽風絵」は、古作を除きすべて吉谷氏の作である。この書の凶版の冒頭に「旭日に鶴」があるが、今号掲載の「日の出鶴」とは微妙に作行きが異なる。相馬氏の長女である會田美喜氏によれば、あるいは吉谷氏のあとを継いだ阿部義夫の作かも、という。相馬、吉谷、阿部三氏の亡き今、確かめるすべはないが、その格調ある美しさは民画の代表の一つといえよう。

(S)

## あとがき

先日山梨の塩山に行った折り、兩宮さんという大工さんを訪ねた。親族の家を建てた方で、若い時、志を立て、近代的工法や加工された材料を用いず、すべてを自らの手で細工している。

平面図は描くが、立体図や細部はみな自分の頭の中にある。膨大な量の木材、松や松、栗、たも、けやきなどを惜し気もなく鉞や手斧で細工し、堅牢で住み易い家を建てる。

縄文時代の石斧も自分で作り、使ってみたいという。先日は県内の銚子塚古墳から発見され、復元された手斧を使った実験的作業にも参加した。

ベルリン郊外での世界各国の大工たちの交流行事にも自費で加わり、望まれて現地に大きな松の鳥居を建てたという。紹介したい青年の一人である。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八四一

二 発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇一―三五六五九

定価 六〇円(税込)